道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信　第５号
令和５年１０月２０日(金)
発行者　校長　井浦　博史

部活動を通して

１学年職員

私は教員になってから長らくバスケットボールの指導に携わらせていただいていますが、今年もバスケット界的にとても良い年となりました。それは、皆さんもご存知かと思いますが、男子日本代表が FIBA ワールドカップで、３勝２敗となり、48 年ぶりに自力で来年行われるパリオリンピックの出場を決めたことです。

大会を通じて、ドラマチックな名場面がたくさんあったかと思いますが、第２戦のフィンランド戦の河村勇輝選手の活躍もその一つでしょう。そんな河村選手ですが、試合に出る際に毎回コートに向かって深々とお辞儀をしていたことに気づいたでしょうか。彼の特集記事で見たのですが、「様々なことに感謝をし、全力で戦うことを誓う」という意味を込めていたそうです。

河村選手は、小学校２年生からバスケを始め、中学校・高校・大学の部活動で活躍をして今のステージにいます。きっと彼の感謝を素直に表し、謙虚な姿勢で生活をする人間性の構築には、部活動も大きく関わっているのではないかと思います。

部活動が縮小傾向にある昨今ですが、まだまだ日本の部活動で学べることがあると思います。仲間と部活動に励む中で、新たな自分を発見し、成長につなげてほしいです。将来大人になっても、「あの時頑張って良かった」と思える青春をおくってほしいなと感じます。

仲間と歌える喜びを大切に

２学年職員

太平中学校の皆さん、先日の体育祭では、今年は例年にも増して暑い日が長く続き、思うように練習の時間が確保できない中でしたが、それぞれのクラスで一致団結し、素晴らしい姿を見せてくれました。体育委員を中心にお互いに協力し合い、時には励まし合いながら、誰一人とも欠けては成し遂げられない、一人ひとりの力が合わさったからこそ大成功に終わったのだと思います。そんな皆さんだからこそ、次は合唱祭に向けて、さらにレベルアップした姿を見せてほしいと思います。

合唱は一人では創り上げることができないもので、クラスの仲間がいるからこそ成り立つものです。だからこそ仲間と歌える喜びを大切にし、１回１回の練習を全力で取り組んでほしいです。

私は音楽科の教員として、今年の合唱祭に向けて「聴いている人に想いを伝えられる合唱に仕上げる」という目標があります。楽譜通りに音程や強弱を正確に歌う、これにとどまるのではなく、それぞれのクラスで合唱曲に向き合い、そのクラスにしか表現できない合唱を披露してほしいです。

今年は全学年での開催となり、全校合唱も行います。太平中学校の生徒全員で歌えることをとても楽しみにしています。レインボープランの高唱の達成に向けて…皆さんの歌声に期待しています。

一隅を照らす 此れ則ち 国宝なり

3学年職員

表題の「一隅を照らす 此れ則ち 国宝なり」という言葉は、「座右の銘は？」と聞かれたら答える言葉の一つです。元をたどれば、天台宗の開祖、最澄の言葉に由来するそうですが、“一隅”とは、「かたすみ」、すなわち「今置かれたその場所や状況」、もしくは「誰も注目しないような目立たない物事」のことです。“自分自身が置かれたその場所で精一杯努力して輝きを放ち、その任された場所を明るく照らすことのできる人”や、“片すみの誰の目にも留まらないような物事にこそしっかり取り組むことができる人”こそ、何者にも代えがたい大切な人物であり、かけがえのない国の宝であるという意味の言葉だそうです。一人が持ち場で全力を尽くして輝けば、その近くを照らすことができる。隣にいる仲間と共に輝けば、より広い範囲を明るく照らすことができる。一人一人の輝きが集まっていくことで、その集団や、社会全体を明るく照らすことができる。私もそんな、自分の足元をしっかり照らせる人に、誰かと一緒に輝ける人に、表舞台の輝きだけではなく、片隅でしっかりと輝く人に気付ける人に、そんな人になりたいと思い、この「一隅を照らす」という言葉がとても好きです。

日常生活のなかで、あなたは一隅を照らしていますか？ 表舞台で大きな輝きを発揮している人は、目立たなくてもしっかりと自分の足元を照らしている人は、あなたの近くにいるでしょうか？時には自ら輝くエネルギーを発するのは難しい時もあります。そんな人が近くにいるときは、いつもよりちょっと頑張って、その人の足元も照らしてあげられるといいですよね。道徳通信という場を通じて、この言葉を皆さんに紹介できたことに感謝です。

“ごめんなさい”と“ありがとう”は早い方がいい！

養護教諭

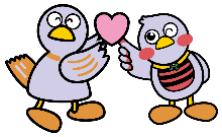
通勤途中、ラジオから聞えてきたこのフレーズが、自分の心にピタリとはまった。

“ごめんなさい”と“ありがとう”は早い方がいい。ファッションモデル アンミカさんの言葉だった。なるほど、この大切な２つの言葉には、伝えるタイミングが大事なんだと。

たしかに、“ごめんなさい”が早いタイミングで相手に伝えられると、同時に自分の気持ちも整理でき、次のステップに向かいやすくなると思う。また、伝えられた側も、モヤモヤやイライラ、ドキドキした気持ちを長引かせないで済むことができる。

ささいなことではあったが、素直に“ごめんなさい”のひと言が、すぐに言えず、その後もタイミングを逃し、結局、“ごめんなさい”ができなかった遠い昔の記憶がよみがえった。早いどころか、“ごめんなさい”が言えなかった自分を後悔し、自分を責め、しばらく心にしこりが残ったことを。

“ありがとう“は、相手に対して自分から生まれる素直な気持ちの表現なので、タイミングや場面を自分で選べることが意外と多いことに気が付いた。対面以外にもメールや手紙などさまざまある。”ありがとう“の気持ちがあったとしても、言葉にしないと相手には伝わらないこともある。時間が経ちすぎて、うっかり忘れてしまうこともある。



早めの“ごめんなさい”と“ありがとう“は、あらゆる人間関係を円滑に、豊かにしてくれる大切なコミュニケーションスキルであると再確認することができた。アンミカさんのこの言葉、生涯、大事に心に留めておけたらいいな。